



神聖かまってちゃんとアメイジング・スパイダーマン 2

弱き者のために戦う意志と覚悟の物語

大衆に作品を届けながら巧みに心が弱き者に「ボンクラよ、がんばれよー」というメッセージを打つ表現者が世界中に存在する。まさか、スパイダーマンなんていうビッグタイトル映画でそれを感じるなんて思ってもみなかった...



先日、映画 アメイジングスパイダーマン 2 を観た。

男前のヒーローがヒーロー活動を行うただのUSA! USA! なマツチョな映画かと思っていた。しかし、実際そうではなかった。

主人公であるスパイダーマンのピーターは男前なのに優柔不断。恋人のグエンに肝心なことがいつも言うことができない男だ。



彼は自分にここぞという最後の一枚で自信がもてない。グエンの父親から「娘をぜったいに巻き込むな」と言われたのに、その約束をよゆうで破っていたピーターだから、スペクタクル映画とくゆう「女は必ず守るぜ」というマツチョイズムまんまんの性格の持ち主か、もしくは「まあ、だいじょぶっしょ」という超楽観主義者のどちらかだと思っていた。ちがった。ピーターはどちらでもなかった。



グエンと付き合っているといつかは巻き込むだろうなあということをピーターはぼんやりと確信していた。

マッチョなら「おれがいるから大丈夫」と思えるし、楽観主義者のばかなら「んなことあないっしょ」と思うだろうが、わたしたちが現実世界で考えてみるとその二択は理想だ。もしも恋人の父親が「おまえスパイダーマンじゃん…。頼むから巻き込まないでくれるか」と最後のことばを放って死んでいったのなら、責任感と罪悪感からヘーキでいられるわけがない。罪悪感に押しつぶされるか、責任感から逃げてしまうだろう。

だからピーターは高校の卒業式のあとグエンの家族と食事をするときに、直前になって逃げてしまったのだ。現実味を帯びている。ひじょうにリアルである。

ロックを嗜好する者も似たような人間だ。↓

ロックを嗜好する者も似たような人間だ。逃げない人間はロックに心を奪われない。ロックというのは弱いのためにある。強い人間はロックを必要としない。仮に学校の廊下の真ん中を自信満々に歩くヤンキーがロックを聴いているならばそれは表層のロックであって、ファッションとして聴いている者だ。

↓

ロックはダウンナーな人間のためにある。



表現というのはそういうものだ。



イノシシを狩って、それを食べて、余った分で外貨を獲得して、高い装飾品を身につけるそのループだけで満足できるなら「表現」を必要としない。それがなくても彼らは生きていけるからだ余裕で。

われわれは逃げたい。すべての嫌なことから逃げたい。逃げれる者はいいい。逃げるという発想もなくここが最高なんだと疑いもなく思える者ならなお最高だろう。しかし、わたしたちはそうではない。

頭のネジを外せばいいものを、どうしても最後に外すことができない。中途半端に外れてるからよけい苦しい。



↓

それは人からみるとばかばかしく見えるだろう。さっさと逃げちゃえばいいなんて言うそれができないからつらいのだ。「おれはおれだ」と自信満々で他人にむかってばかみたいに外を歩けないし、「うじうじ考えても仕方ないよ。どう一でもいいよ」と楽観的になることもできない。

やりたいことや言いたいことがあるのにだれも守ってないような責任感をしょってあーでもないこーでもないと勝手に頭かかえてる人間がわれわれである。

アメイジング・スパイダーマン2のピーターが抱えてる苦悩はそれに重ねることができる。↓

アメイジング・スパイダーマン2のピーターが抱えてる苦悩はそれに重ねることができる。グエンと一緒にいたいという自分の思いとグエン父の遺言を破ってしまっていて、なおかつグエン父が正しい意見だということも理解しているピーター。狭間で悩んでいる。かれは優しい。そして臆病だ。

↓

身体的には何十メートルの高さから落ちてもヘッチャラだし、乗用車をヒョイっと持ち上げる能力の持ち主だが、ボンクラ同様に肝心なことがいえない臆病なメンタルをもっていた。ピーターがそれとどう対峙していくのかがこの映画の見所である。戦闘パートよりもドラマパートこそアメイジング・スパイダーマン2という映画が存在する意義だ。



弱い者のための表現であるロックだが、それがまっとうに行われることは少ない。↓

弱い者のための表現であるロックだが、それがまっとうに行われることは少ない。表現者はかならず見栄が出てくるからだ。

その見栄を作品のなかでどれだけ殺せるかが表現者のレベルの高さである。弱き者は人に敏感だ。作品のなかにある歌やことばに偽りのものを感じれば、すぐに切る。弱き者は自分にとっての何かを強烈に欲しているからだ。



さまざまなバンドがいるなかで、神聖かまってちゃんは楽曲のなかで見栄がない数少ないバンドだ。誠実である。強き者のために歌ってない。弱き者のために歌っている。だから信用できる。

たとえば、彼らは上から目線ではない。2014年の4月9日に発売されたニューシングル「フロントメモリー」という楽曲がある。

今日はやる気はないって／ラッキーアイテムを持って
Hip Hopなフリして／自分とギリ生きている
会話も了解ですメールすらも／居留守して1人歩いた
iloveyouって英語で習ったんだっけ？

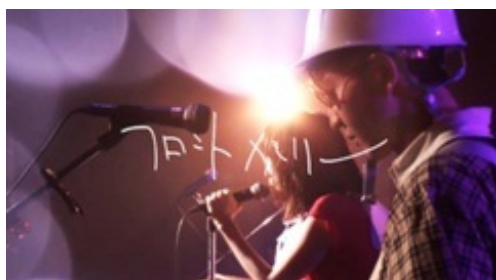
はじめ主人公は頭抱えて悩んでいる様子が描かれる。ヒップホップな気分に見せてじつは心のなかではギリギリで心が擦り切れているという。メンタルの部分でダウンナーな主人公であることが分かる。

↓

急にアイスが食べたい真夏日／外はテカテカしてまちあっちーし
僕はこの恐怖症／みたいなやつを時々感じちゃうから
42キロの重い／絵文字使った歪な想いは
Recした夕方の中

アイスを欲しているというのは、意志や希望をもっていることを意味している。しかし、外はあっちーし／この恐怖症 ということばに象徴されるように、外へ出ることをひじょうに辛く感じている主人公。

意志があるのにそれが果たされない絶望を感じているのだ。



↓

そしてサビはこう歌われる。



ガンバレないよ

ガンバレないよ

ガンバレないよ

そんなんじやいけないよ



これしかない！と思うほどのボンクラの心の叫びがここにあった。日本のロック史のなかでサビに「がんばれないよ」を連呼する曲があるだろうか。ない。

弱き者によりそう楽曲である。こういう曲は作れそうでなかなか作れない。社会や人の道徳観に反するようなことばを表現のなかにいれるには覚悟にも似た「意志」が必要だからだ。

これが例えば、映画や漫画ならこういう類はよくみるだろう。しかし、それは物語という「これはウソの世界ですよ」というお約束のもとでキャラクターが言っていることなのでシンガーソングライターやミュージシャンのそれとはちがう。

自分で考えたことばをお芝居というフィクションで他人に言わせるのと自分の口から言うのとでは「意志」の強度がまったくちがうのだ。

たとえば、「ドラゴンボールはばかマンガ」ということばを映画脚本↓

たとえば、「ドラゴンボールはばかマンガ」ということばを映画脚本として人に言わせるのと、自分がミュージシャンとして楽曲のなかで歌詞にして歌うという二つを考えると、ぜったいに脚本で他人に言わせた方が楽だ。

自分のことばを自分で歌うと考えると謎のプレッシャーが発動してしまうからだ。だから言いたくない。

ミュージシャンは言い切る意志が必要なのだ。



の子は社会的正義ではない世間ではひじょうに言いにくいとされる「がんばれないよ」ということばを言い放った。これはそうとうの意志が必要だ。それが出来るからの子はロックミュージシャンとしての素養が高い。



↓

さらに、この楽曲には見栄がない。かっこつけようとしていないのだ。弱き者のために誠実に届けられた楽曲である。この見栄のなさすごい。

弱き者のために誠実にロックンロールを叩きつける。

だから神聖かまってちゃんは現代のロックバンドのなかで信用できるのだ。



弱き者のために誠実にロックンロールを叩きつける。

だから神聖かまってちゃんは現代のロックバンドのなかで信用できるのだ。←



うおお

神聖かまってちゃんとアメイジング・スパイダーマン2 弱き者のために戦う
意志と覚悟の物語

<http://p.booklog.jp/book/100446>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ